

# 水とハイテクの融合目指す出雲のベンチャー企業 小松電機産業

▼昭和六十年に発売したシートシャッター「門番」の大ヒットで小松電機産業は島根県出雲の一地方メーカーから一躍全国区に躍り出た。平成四年には上下水道の遠方監視システム「やくも水神」を開発。小松昭夫同社社長は出雲にベンチャー企業ありきという神話をつくろうとしている。

## 三万台の大ヒット になった「門番」

勤めていた会社が会社更生法を申請——。このときから小松電機産業社長の小松昭夫氏の運命は大きく変わった。後から見れば、それが島根県有数の企業を生み出す一つのきっかけになったのだから、人生何が幸いするか分からない。

小松氏は昭和十九年島根県生まれの五十歳。三十八年松江工業高校機

械科を卒業後、エンジニアを志向し、農業機械の佐藤造機(現・三菱農機)に就職する。同社中央研究所で、朝から夜中まで農業機械の設計・開発に従事していた。

小松氏入社時の資本金二億円から数年で二十二億円になり、佐藤造機は一部上場会社にまで成長した。ところが、時代のニーズとかけ離れた経営をしていたため、会社は次第に傾いていく。

アイデアマンの小松氏は経営陣にさまざまなアイデアを提供するも、

一顧だにされなかった。とはいえ、佐藤造機の成長と没落の両方を経験したことは、のちの企業経営に教訓として生かされる。

四十六年に佐藤造機が会社更生法を申請し、それを機に八年間在籍していた同社を退社する。「一生、エンジニアをやるつもりで、会社をつくる気持ちは全くなかった」小松氏の運命が大きく変わる。

大阪の商社や設計事務所に二年間勤務。島根に戻って、最初は実弟の光雄氏(現・小松電機産業専務)と二人で資金十数万円で修理業を始める。担当は小松氏が機械、光雄氏が電機だった。

「注文があれば何でも挑戦した」と言うように、どんな仕事でも引き受けたので、信用を得るようになる。やがて修理業からポンプ販売に手を広げる。

四十八年、小松産業を設立。水道の給水施設を自動制御する計装システムをはじめ、排水制御盤、電機制御盤、冷凍機制御盤などの各種制御盤を製作。創業時から技術力では定評があった。

五十七年に小松電機産業に改組するが、転機となったのは六十年に発売した高速シートシャッター「門番」の大ヒット。おかげで同社は島根県のローカル企業から全国区の企業へと脱皮することができた。

「門番」は物体が近づくと超音波センサーが感知してシャッターが巻き上がり、通過すると閉まるビニール製の自動閉閉式シャッター。車から降りずに短時間で開閉でき、防寒、防風、防塵に優れ、作業の効率アップや安全性の向上に役立つ。

文化シャッターと提携して全国で本格的に発売したところ、今までに例のない画期的な商品として大ヒット。採用する工場は後を絶たなかった。現在までのところ、十年間で累計三万三千台の売れ行きを記録し、韓国では現地生産も行っている。

そもそも「門番」は、三菱農機から特殊なシャッターをつくってほしいという依頼を受けて製作したことから始まった。シャッターの製作には気乗り薄だった小松氏も、出来上がった製品の質に大鼓判を押され、本格生産に踏み切ったのである。

## 他の追随を許さない技術・開発力

小松電機産業の名が全国に知れ渡

るきっかけを与えたものの、小松氏

